



ヒナゲシ

148 編も、ハレルヤ（神をほめたたえよ）に始まり、ハレルヤで終わる詩篇です。

この詩編は 主を賛美せよ という言葉が8回、そして、2つのまとまりごとに、主の御名を賛美せよ が用いられています。賛美せよ という言葉が計 10 回用いられています。10 回とは、数の点では十戒と一致しています。

さらに、次々と、呼びかけては、命じるといふ、シユプレヒコールのような、短い文言で、展開していく賛歌形式が興味深いです。

前半部分は、ハレルヤ。天において主を賛美せよ(1a) で始まりますが、天の万物が賛美するよう、命じられています。第一に命じられているのは、御使いらよ、こぞって主を賛美せよ。主の万軍よ、こぞって主を賛美せよ。(2) とあるように、主のもとで燃える火となって仕えているものが、風に吹かれ、雲に乗り、民のもとに遣わされて、主の御用をする、目には見えない天使たちです。第二に、日よ、月よ 主を賛美せよ。輝く星よ 主を賛美せよ。(3) とあるように、天空に輝く光、天体、星座に命じられ、私たちはそれらを遥かに眺めることができます。第三に、天の天よ／天の上にある水よ 主を賛美せよ。(4) とあるように、天から雨となって降り注ぎ、地を潤し、実りをもたらす水に呼びかけています。地球は水の惑星と言われていますが、2000 年以上前の詩人の時代にも水が、天における万物の要の一つとして考えられていたのは、驚くべきことです。これらを纏めて、天における万物に、主の御名を賛美せよ と呼びかけています。天における万物は 主は命じられ、すべてのものは創造された。(6) 主はそれらを世々限りなく立て／越ええぬ掟を与えられた。(7) と、主の創造によるもので、確実な秩序と境界があると告げています。

後半部分は、地において主を賛美せよ。(7a) と始まり、地の万物が賛美するよう、命じられています。第四に命じられているのは、海に住む竜よ、深淵よ(7) とあるように、海、湖、沼、淵、川などに潜む、混沌と不安を暗示する生き物や自然です。第五には、火よ、雹よ、雪よ、霧よ／御言葉を成し遂げる嵐よ(8) と、大気の中で縦横無尽に動き回る気象です。第六には、山々よ、すべての丘よ／実を結ぶ木よ、杉の林よ(9) と、地を形づくっている山々、また、そこで育つ森、林、果樹です。第七には、野の獣よ、すべての家畜よ／地を這うものよ、翼ある鳥よ(10) と、地に生きる鳥獣です。第八に、地上の王よ、諸国の民よ／君主よ、地上の支配者よ(11) と、人間に呼びかけています。特に 王／君主／支配者 は地の代表者、責任者として呼ばれているのではないのでしょうか。続いて、若者よ、おとめよ／老人よ、幼子よ。(12) と、すべての地の民が呼びかけられます。これらを纏めて、地における万物に、主の御名を賛美せよ と呼びかけています。高く、威光あるものは主のみである、と告白しながらも、主は御自分の民の角を高く上げてくださる。それは主の慈しみに生きるすべての人の榮譽。主に近くある民、イスラエルの子らよ。ハレルヤ。(14) と、民の幸を感謝しつつ、賛美しています。



『讚美歌 21』は東京のカトリック教会司祭・佐久間彪神父(1928-2014 写真)作詞・作曲による答唱の形の171「かみさまのあいは」(743) [こども #讚美歌 #神様の愛は 愛はしみ通る。歌詞付き - YouTube](https://www.youtube.com/watch?v=zP-1McTRfE0&list=PL15DF46D76CA72F5E&index=148) を挙げています。ジュネーブ詩編歌は低音に設定されたヴァイオリンと低音のクルムホルンによる重奏です。

<https://www.youtube.com/watch?v=zP-1McTRfE0&list=PL15DF46D76CA72F5E&index=148>